

平安群盜伝

北野社

(一)

夜更けて雨になった。社殿の檜皮葺ひわだぶきを打つ音が幽かに伝わってくる。床下の奥深く身を潜め、地虫のごとく蹲うずくまる五体に、霜月の夜の冷気がじわり忍び寄ってきた。

日暮れどき、重く垂れ込めた雲の下、暗然と横たわる京西郊きょうせいせうの連嶺を目に納め、この本殿下に潜り込み、用意の花筵はなむしろを頭からすっぽりかぶると、体を丸め長い夜の任に就いた。

時おり筵の隙間から前方を窺う。すでに同じ動作を幾度くり返したことだろうか。もう二刻近くは過ぎたことだろう。だが、見据える前方には今だ何ひとつの変化もなく、社は夜半よわの雨と深い闇の中に眠っていた。

さらに夜が更けた。じっと見張る彼の体は先ほどから妙な強張りを覚えていた。何やらおぞましいものにじっと見入られている。そんな思いに駆られ始めていたのだ。

漆黒の闇の中、得体の知れない物怪もののけが真っ赤な口を開け、今にも背中へ襲いかかってくるような思いに捉われていた。

たまらず義譽よしおきは筵をはねのけ、辺りを打ち刀で薙ぎ払った。

「……」

だが、ぎえーっとも何とも悲鳴も上がらず、いぜん深い闇溜まりがあるだけで、ふたたび微かな雨音が戻ってきた。気づくと彼の手はじつとりと汗ばんでいた。思い直すと払いのけた筵をかき寄せ、かぶり直すふーっと一つ大きく息をついた。

——面妖めんような。

外では先ほどまでの雨音も細く、雪にでも変わったものなのか、静けさの中、一段と寒気が募ってきた。ぶるっと頭をふり、衿を合わせたときちょうど空腹を覚えた。腰の麻袋をまさぐり、焼き米をひと握り掴み出すと口に抛ほうり込んだ。

次いで喉の渴きを覚え竹筒の水を飲むと、ぶるんと冷えが体を走った。しばらくのち腹がふくれると夕刻からの張りつめていた気持ちゆるみ、眠気におそわれ始めた。

(二)

これより十日前、下京しもぎやう一带の巡回を終えた義譽ら数人は夕刻、右兵衛府うひょうえふに帰り着いた。すぐさま洗い場に行き頭から何杯もの水をかぶり埃まみれの体を洗い流すと生き返る思いになった。

突然部屋の外に慌ただしい足音が走り、不意に引き戸ががらりと開けられて、見ると下働きの伴根ともねじい翁が

顔を覗かせ息を切らしている。

「どうした爺」

「有道さまのお越しですら」

「なに」

義譽は体の水を拭き取り、急ぎ身繕いを済ますと、表の通路に飛び出し身を低くして有道どのの足音を待った。

「おう兵衛、おったか」

「はっ」

「突然じゃが頼みがあつての、後ほどわしを左兵衛府まで案内してくれ」

「は、承知いたしました。して、身支度はどのように」

「かしこまったことはいらん。それとまだ少し早いでの、それまで一休みしておればよい」

有道はそう言い残すとさっさと踵きびすを返し戻っていった。

——なんだろう、あのお方は、いつも唐突でさっぱり解せぬ……。

思えばいろいろな事が頭をよぎる。義譽が郷里、備前国児島郡を発つてからの二年。その間彼は兵衛として内裏だいりの警護に明け暮れる日々が続いた。だが一方、有道からは誰もが根を上げるほどの鍛錬と厳しい行儀の教えを受けてきた。

有道は情け容赦なかった。弓と刀術、また厳しさは当然馬術にも及んだ。彼はいつも誰もが苦しむ姿を

見ては、その三白眼を鋭く光らせ、口元を歪めては叱咤しつたすることに、ご満悦の様子だった。

しかしこの午後の急な訪れに普段のそんな顔は持つておらず、穏やかで柔らかな面持ちおももでの洗い場への出現に、義譽は薄気味悪い思いがした。

——妙なことだ。あの御仁ごじんにあんなに虫の居所の良い時もあるものなのか……いずれにせよ変なことだな。義譽がそんなすっきりしない思いでいるとき、うしろに何かの気配を感じ振り返ると、同輩もりよりの盛順が笑みを浮かべて立っている。

「なんだお主か」

「有道どのがお見えになったようじゃな。なんぞ出来しゅつたいいたしたのか」

「いや、よう分からぬわ。じゃが、なんでも左兵衛府まで伴ともをせいとお言葉じゃった」

「ふん、らちもないわ。お偉方がかような洗い場なんぞへ出向くこともないものを、いやな奴め」

盛順はそう言うと言を鳴らし、面白くもないわと言わんばかりの顔で戻っていった。

——この男いつも不意に現れる。何かを聞き回っているのも二、三度目にした。どうも気になる男だな、と義譽は思った。

半刻はんとき（一時間）の後、有道を乗せた鹿毛かげの手綱を取った義譽は大内裏西だいだいりの殷富門いんぷもんを出た。辺りにはすでに宵闇よいやみが漂っている。人影も少なくなつた大路を南へ向かう。間もなく右馬寮うめりょうが見え、その角を左に曲がり二条大路に入つて東へ向かつた直後、有道が口を開いた。

「兵衛、わしは歩いて行くわ」

そう言つて彼は馬を降りるとすたすた歩き始めた。すぐに朱雀門すざくもんに差しかかる。見るとそこには十人近い警護まもりのふの士の姿があつた。

有道は目もくれずに先を急いだ。美福門びふくもんの前に来た時、不意に立ち止まると声をかけてきた。

「兵衛、今宵はのう、お督かみに会あうて貰もらうんじや」

「兵衛督ひょうえのかみどのに……」

「うむ、お顔は存じ上げておろう。遠度とほのどのじや」

義譽は驚いた。引く手綱にそれが伝わつたものか、鹿毛がぶるんと大きく首を振つた。

藤原速度ふじわらのとほのと言へば、左・右兵衛府を束ねる長官だ。義譽は訳も分からずただ黙もくしていた。

雅楽寮ががくりやうの角を左に折れ東大宮大路ひがしおおみやおおじを北へ上る。さらに門を二つ越すと左に陽明門ようめいもんが見えた。我々を目にした警護の士が走り寄つて来、義譽から手綱を受け取ると小者は馬を引いて去つた。次いで別の者が二人現れ、案内のため先に立つた。

玄関口に着くと衛府えふの上役と思われる者が待機しており、二人を長い廊下の奥へと導いていった。やがて奥まつた箇所とある小部屋の前まで来ると、案内の者が中へ声をかける。

「待つておつたぞ」

中から高く澄んだ声が返つてきた。義譽は有道の言うままに一礼をし部屋に入った。続いて下座に座ると平伏して何事かを待った。

「お督、これに連れ参つたのが彼の兵衛かにござりまする」

有道はそう伝えると後ろの義譽に挨拶するよう促す。

「右兵衛、樋之津義譽にござりまする」

彼は顔が火照った。

「うむ、ご苦労。ま、楽にいたせ、まずは面を上げてくれ」

「はっ」

義譽は硬ばる心で顔を上げた。正面に秀でた額と凜とした切れ長の目を持つ兵衛督の顔があつた。

これまでに遠目には何度か拝したことのあるものだったが、間近では初めての事だ。

藤原遠度は、二年前の天元元年、右大臣に累進した藤原兼家の弟で、父は藤原師輔、その七男であつた。

余談になるが、これより遙かに時代を遡ること三百有余年の白雉二十年、多大な功績により時の天智帝

から藤原朝臣の姓を賜った中臣鎌足にその祖を發する、藤原一族の朝堂での君臨の一端を担う謹嚴実直の

人と見られていた。

「さて右兵衛、そちの郷国はいずれぞ」

遠度が問いかけてきた。

「はっ、備前国にござりまする」

「ほうー。古の和氣清麻呂どのの郷里ではないか」

「はっ、仰せのとおり。ただ、朝臣どのは和氣郡藤野の御方、私めは兎島郡の出生にござりまする」

「そうであつたかー」

遠度は一瞬言葉を切ると何事かを思案するような面持ちになった。

「朝臣どのの古は良き日々であったらうな、有道」

声をかけられ、それまで義譽の粗相なきことだけを祈っていた有道が慌てて督の方へ向き直り答えた。

「はい、仰せの通りにござりまする。年寄り共から良き話を数多く耳にいたしております」

「うむ。さて兵衛、今宵呼び出し致した事柄について話そう」

少し間があつて督はおもむろに口を開いた。

「かような事は兩人共にすでに聞き知つておろうが、清麻呂公は桓武帝かんむていの下、多大なる苦心をはらわれこの都みやこを造営なされた。だが創建時とはともかくどうであろう、近年のこの京の荒れ様は。清麻呂公も天上でお嘆きであろう……」

この年（九八〇）秋七月、京の要とも言うべき羅城門らじょうもんが大風によつて倒壊した。

「だがのう兩人、大風暴雨は風雷神おおかせほううのなせる業わざ、いかんともし難くまだ諦めもつく。それに引きかえ、なんと心得心のゆかぬもの、それは雑人共ざうじんのこの京での乱行につぐ乱行ぞ」

ここで督は前に置かれた白湯さかに手を伸ばすと一息に飲み干し、ふーっと一つ息をついた。

督の落胆にじっと耳を傾ける義譽にもいくつも心当たりのあることであつた。督の嘆きが続く。

「草賊そうぞくどもは押し込み、強盗がんとうはもとより、放火、殺掠さつりやくと狼藉の限りをつくしておる次第、各衛府にも町人が多勢押しかけてはもろもろの難儀を訴え続けておる……、皆このままではこの後の生活たつきが立ち行かぬと。また、金品を強奪された上、邸やしを焼かれ、女たちをさらわれた商人たちも悲嘆にくれ、もう京を離れるし